

国際結婚と文化の違い

大津 隆文

今年の正月はシンガポールから娘一家が来宅し賑やかに過ごした。苦勞したのは婿（英国人）や孫娘（小三）とのコミュニケーションで、我が英語力の低下を痛感した。ともあれ娘夫婦は結婚して十年余りまずは円満に過ごしているようで何よりだ、と思っただけでもないらしい。

娘は自分が体調不良の時などに彼が優しい言葉をかけてくれないと不満を漏らす。この点、やって欲しいことがあれば言葉にして言うてほしいというのが婿の立場で、言われてするのはなく気持を察してほしいというのが娘の立場らしい。英国と日本の文化の違いを感じると娘は嘆く。

食事や外出の時、私達に騎士道のマナーのような気遣いをしてくれる婿なのにと驚く。家内は日本人だっと思っていない人はいるわよと慰める（私は身の縮む思い）。娘はこれは彼個人の問題と思うより文化の違いと思った方が、気持が救われるとの立場だ。

文化の違いの背景として娘があげるのは教育の違い。日本の教科書には「その時のカエルさんの気持はどうだったでしょうか」などと気持を察する質問が多いという。これが外国では「その時のカエルさんの行動についてどう考えますか」となるらしい。学校でも家庭でも相手の気持を察することが重んじられ、これが思いやり、さらには「おもてなし」として海外からも評価されているのではないかと言う。

相手の心情への気遣い、周囲への気配りは大切であるが、囚われ過ぎはマイナスだ（生田正治氏『和のための和を以て尊しとせず！』）。「空気が読めない」のはKYと揶揄されるが、独自性の発揮が社会にプラスになる例も多い。協調性は個人の社会的な成功にはマイナスとの研究もある。気配りの余りお互い本音か上辺かよく分からず、「もう一つどうぞ」などと押し問答になったりする。時には煩わしく、極端な例は「京都のぶぶ漬け」だろうか。

国際結婚に食習慣を始め文化の違いが伴うのは確かだが、出発点を思い出し仲良く乗り越えていってほしい。